

震災リゲイン Press プレス

第43号

支え合い、備え、いのちをつなぐ

震災復興・防災情報専門メディア 全国4万部配布
発行元：特定非営利活動法人 震災リゲイン
発行人：相澤久美 編集人：内田伸一
編集部：〒106-0044 東京都港区東麻布2-28-6
Tel：03-3584-3430 Fax：03-3560-2047

みちのく潮風トレイルを歩く 第9回

Walking on Michinoku Coastal Trail

「みちのく潮風トレイル (MCT)」は、2019年に誕生した長距離自然歩道／ロングトレイル。青森県八戸市から福島県相馬市まで東北太平洋沿岸の1,000キロ超に及ぶ、自然と町を繋ぎ「歩いて」旅をするための道です。東北の復興と振興を後押しするため環境省が敷設し、4県28市町村、市民が協働しています。次代への願いが込められたこの道は、どんな風に育っていくのでしょうか？ 実際に歩いたハイカーの声をお届けします。



東北を
歩いて
応援！



①2018年9月18日 昆布を干していた方とご挨拶 (青森県三戸郡階上町 大蛇漁港)

なぜ歩いたか

2011年頃から長距離ハイキングにはまっていました。2016年～2017年にかけて、ニュージーランドのテ・アラロア・トレイル(全長3,000km)を約半年かけて歩きました。壮大な自然の中を毎日必死で、相次ぐ悪天候と悪路で揉みくちゃにされながらの日々でした。ある嵐で遭難寸前になった後、なぜか唐突に、三陸地方の人に来てお話を聞いてみたいと、ふと思いました。ひとたび自然が暴れた時、人にはなす術がないことや、それでも生き延びた人たちは今もその後を生き続けているんだな、など、人間の小ささと強さ、どちらも知っている人がいることを思い出したのです。幸いにも帰国後、とあるイベントでみちのく潮風トレイルの関係者の方から公式地図を頂く機会があり、軽い気持ちで八戸に向かい歩き始めました。

歩いている間に印象に残ったこと

ごく普通の日常生活が営まれている風景は、観光地とは違う安らぎが

今回のハイカー

地現葉子さん(宮城県石巻市[歩いた当時は東京都])

出発地：2018年9月21日 青森県八戸市 蕪島(北端)

到着地：2020年1月6日 福島県相馬市 松川浦(南端)

歩き方：トレイルを区切りながら歩くセクションハイク。大型連休等を利用して1度に100～200km程度、全8回。延べ50日。テント泊21、宿泊施設や小屋等20、民家1。

その後：幸運な事に「みちのく潮風トレイル」のマップブック制作等に関わらせていただきました。三陸への思いが高まり、ついに2022年8月、宮城県石巻市雄勝町に移住しました。

あります。絶景ポイントよりもむしろ、路上に昆布が干してあったり薪を割っていたりする光景の方が、なぜか印象に残るものです。旅人は通過するだけの亡霊のような存在ではありますが、日常の場に飛び込んでくハイカーとの交流は、地元の皆様にとってもちょっとした非日常体験と感じて楽しんでいただけていることを知りました。こうした出会いが刺激となり、何らかの化学反応が生まれそうな予感がしていました。

(⇒次ページに続く)

みちのく潮風トレイルを歩こう！

詳しくは▶NPO法人みちのくトレイルクラブ

🌐 <https://m-tc.org/>



②エビフライ拾いに夢中
(ホンドリスが食べた松ぼっくり食痕)(宮古市田老 真崎漁港一田老間の遊歩道)

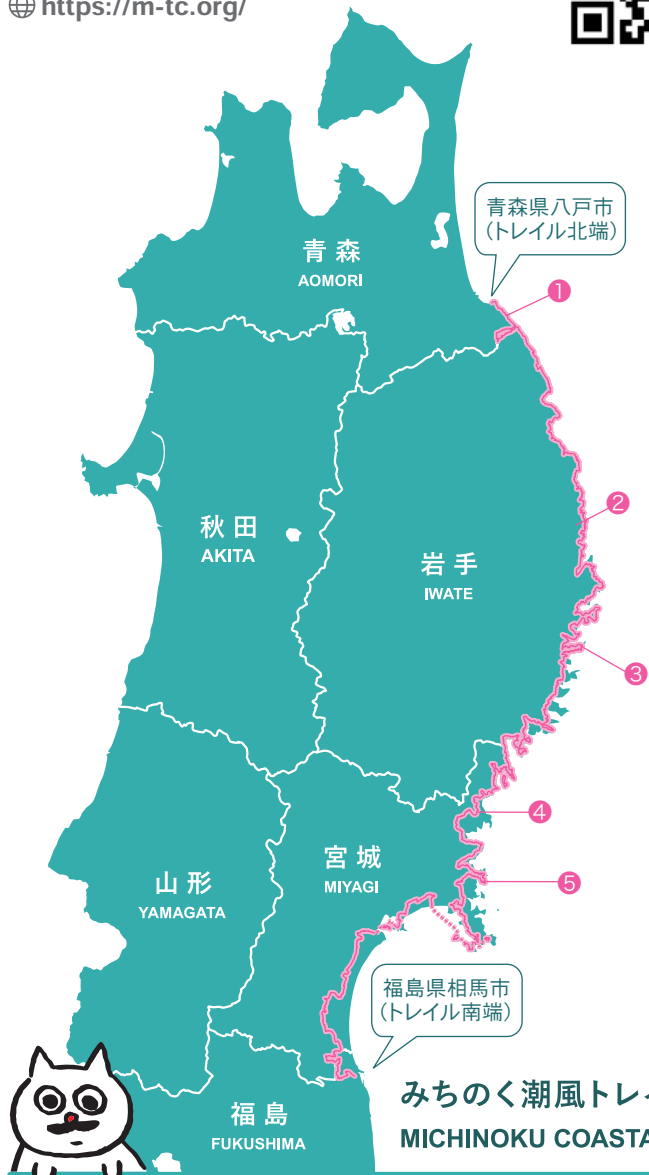


(→前ページの続き)

歩き終わって何を思う

東日本大震災の時、私は何もできませんでした。しかし8年を経て、急速に復興が進み、変化の時を迎えつつある三陸地方は、私の人生を変えてしまうほど数多の出会いを与えてくれました。スルーではなく、あえてセクションに区切って歩いたことで、長期間にわたり三陸に通い、より思い入れが深くなりました。歩いていた時、特に宿泊施設が少なく不便な土地であった石巻市北部に、ハイカーのための宿泊施設を作りたいと思っていたところ、ご縁があつて雄勝町に移住しました。早速、自宅の空き部屋を活用して民泊を始めました。たくさんのハイカーさんに訪れていただきたい、地元の方と旅人との交流がいつそう増えるといいな、など色々妄想を膨らませています。

③2019年4月28日 親子連れ
のクマが居るからと半ば強引に軽トラに乗せられ、御箱崎神社の境内まで連れて行かれてしまいました。そんな愉快なハプニングは大歓迎でした(岩手県釜石市 御箱崎)



みちのく潮風トレイル MICHINOKU COASTAL TRAIL

みちのく潮風トレイル憲章

4県28市町村を貫く「みちのく潮風トレイル」を多様な人々の間で共有するために策定されたこの憲章は、なぜこの道が生まれ、何のために未来に繋いでいこうと願うのか、の思いや理念が記されています。

1. 美しい風景と風土を楽しむ道とします。
2. 地域に暮らす人々とこの地を訪れる人々との間に心の交流が生まれる道とします。
3. 自然の優しさと厳しさを胸に刻む道とします。
4. 震災をいつまでも語り継ぐための記憶の道とします。
5. 豊かな自然・文化を次世代へ受け継ぐ道とします。
6. 歩くことを愛する全ての人々を歓迎し、皆で育てる道とします。



④2019年12月24日 ひんやりした空気が気持ちいい朝。偶然知り合った面々と、旅の道連れとなりました(宮城県南三陸町 田東山 行者の道)

⑤2019年12月28日 雄勝観光物産交流館「おがつ・たなこや」。この時出会った雄勝タクシーのドライバーさんは、今うちの隣人です(宮城県石巻市雄勝町)



読者プレゼント

以下ご記載のうえ、本紙最終ページ下に記載の編集部宛(ハガキ/Fax/E-mail)にてご応募ください。

- ①郵便番号・住所・名前・電話・性別・年齢
- ②よかった記事
- ③ご感想・ご意見
- ④本紙をどこで手に取りましたか?

みちのく潮風トレイルData Book 3名

提供：NPO法人みちのくトレイルクラブ

同トレイルを歩く上で役立つ地点情報を満載。



※2023年7月11日締切。当選発表は発送をもって代えさせていただきます。また個人情報はこの発送以外に使用しません。



文＝神保清司

1976年山形県米沢市出身。NPO法人千葉自然学校 事業部長 兼 南房総市大房岬自然の家 所長。

令和元年の房総半島台風で被災して、大量の風倒木の除去活動をボランティアの力を借りて進める中で、いくつかの問いと気づきを得ました。

ひとつ目は、なぜ大きな木が大量に根こそぎ倒れたのか？という問いでした。伐採作業を行いながら私たちがたどり着いた結論、まずは、そもそも台風自体が超強力だったということ。そして南房総の低山は岩盤の上に薄い土壌が乗っていて、その場所で大きくなり過ぎた木の重さを根が支えきれずに、土壌ごと根こそぎ倒れたと考えています。南房総では明治時代ぐらいから漁業資材や薪炭用として、成長が早いマテバシイの木が人為的に大量に持ち込まれた経緯があります。そして近年、薪炭林として活用されなくなったマテバシイの森は大きく成長し、今回、里山や農地や住宅の傍で被害をもたらしたのでしょう。

二つ目は、台風の前年から木々の弱体化は始まっていたのではないか？ということ。前年の平成30年ぐらいから、マテバシイをはじめとするドングリが生る木々の立ち枯れが目立ち始めていたのです。これはカシノナガキクイムシという甲虫が媒介する病原菌によって蔓延する、ナラ枯れ病が原因でした。木の根元に細かい削りカスのようなフラスと呼ばれる粉が積もっていて、大きくなり過ぎた老木ほどナラ枯れ病に蝕まれる傾向にありました。

一見元気そうな樹木も、その内部はカシノナガキクイムシが持ち込んだ菌に侵されて折れやすくなっていた可能性があるのです。実際に台風被災以降、ナラ枯れ病は一気に蔓延しました。おそらく台風被害の風倒木と同等ぐらいの木々を伐採したかもしれません。

私たちは復旧活動を通じて、改めて森や海の持つ機能に気がきました。同時に自然の循環と断絶された現代的な生活のひずみにも気付くことができました。少しずつ本来あるべき自然と人間の関係性を取り戻すような活動を始めています。今は、炭焼きを通じた森の循環を促進するために炭焼き窯を作成しています。人が森に入り、手入れを続けることで土壌も改善し、降った雨がしっかりと海に届くように活動を続けていきます。



一般社団法人RQ災害教育センター
rq-center.jp

3.11 伝承ロードを訪ねて

記憶を
受け継ぐ

第9回・タピック45 [旧・道の駅高田松原]
(岩手県陸前高田市高田町)



文＝多勢太一(一般社団法人陸前高田市観光物産協会)

千葉県船橋市生まれ。大学卒業後は都内の人材企業で法人営業の仕事に1年半従事。2020年9月に地域おこし協力隊として、岩手県陸前高田市に移住。現在は(一社)陸前高田市観光物産協会で「高田松原津波復興祈念公園パークガイド」や、同市における「みちのく潮風トレイル」の振興に携わる。

連載9回目の今回は「タピック45(旧・道の駅高田松原)」についてお伝えします。

タピック45は、1991年7月に開業した陸前高田市の総合観光情報発信施設(高田松原シーサイドターミナル)内にあった「観光情報館」の愛称で、1993年には岩手県内で2番目の道の駅として登録を受けました。愛称のタピック(TAPIC)45には由来があり、高田(TAKata)、松原の松(Pinetree)、インフォメーションセンター(Information Center)それぞれの頭文字に加え、国道「45」号線沿いに位置していたことからこの数字をとって名付けられました。その後、2000年代には太鼓館や駐車スペース、物産館などが増築され、地元産の農産物や生鮮魚類の販売に加え、様々なイベントが開催されるなど、観光客だけでなく市民にも親しまれる施設でした。

開業から20年を迎えようとしていた中、東日本大震災が発生。陸前高田市は地震と津波によって壊滅的な被害を受けました。当時のタピック45は、避難が遅れた人の緊急避難ビルに指定されており、屋外の三角屋根の階段を駆け上がられるようになっていました。実際にタピック45には高さ14.5mの津波が押し寄せましたが、海の近くで仕事をしていた3名の方が屋外の階段を登り、なんとか九死に一生を得ました。

災害発生時は、一分一秒を争う特別な状況の中で次々に意思決定を行い、即座に行動に移すことが求められます。そのためには、あらかじめ備えることが重要です。自分の住んでいる地域や勤務先で想定される自然災害は何か？避難場所はどこか？実際に災害が発生したと仮定して、被害状況に応じた避難経路を何パターンも思い浮かぶか？自分の命を自分で守るために、できることから備えていきましょう。



タピック45の屋外階段

タピック45

岩手県陸前高田市高田町古川28-5

※現在は震災遺構として保存中のため、館内の見学は高田松原津波復興祈念公園のパークガイド同伴でのみ可能(詳細以下)。

takanavi.org/shinsai/

3.11伝承ロードの詳細は▶一般社団法人3.11伝承ロード推進機構

www.311densho.or.jp

行って
みよう

災害支援を地域福祉から考える

支え合う
ために

第4回・災害時に事業継続を行うために ～福祉分野のBCPとは～



文＝園崎秀治（オフィス園崎）

オフィス園崎代表。27年勤務した全国社会福祉協議会を2021年に退職、独立。多様な災害支援関係者との支援体制構築、防災・減災活動や、ボランティア・NPO・福祉専門職等による支援に関わり続ける。

www.officesonozaki.net

2021年、福祉事業者に対する災害時の事業継続計画(BCP)の策定、研修・訓練(シミュレーション)の実施等が、3年間の猶予をおいて義務づけられました(2024年4月から義務化)。

策定の背景には、災害時に命を落とした高齢者や障害者の割合が常に多いことから、自治体に対する個別避難計画策定の義務化と同様に、福祉事業者に対策の強化を求めたことがあります。

BCPとは、もともと中小企業が自然災害や感染症、大事故などに面した時に倒産を避けるために内閣府がそのガイドラインを発表したことに始まっていますが、福祉分野では守らなければならない命が関わってくることから、その内容は大きく異なります。また、公益的な位置づけの社会福祉法人等は、被災地の市民に対する社会的な責務も果たさなければなりません。

現在、介護・障害分野の事業者はBCP策定を急いでいますが、ひながたの穴埋めをした計画書が完成すれば災害対策になるわけではありません。

大切な視点としては、その地域にはどのようなリスクがあるのかをしっかりと洗い出すことから始めることが肝要です。地域によって災害の種類ごとに想定されるリスクは大きく異なります。職員体制や法人の規模などによっても条件は大きく異なるものです。活きた計画にするためにも各業務に精通する職員がそれぞれ策定に参

加すること、プロジェクトチームの編成、そして策定後の継続的な周知啓発の機会を持つことが重要です。

初動の動きが後の行動を大きく左右することからも、職員が在宅時に被災することも想定して連絡を取り合える体制が重要です。昨今SNSやZoom活用が定着していることから、それらを有効に活用した初動の連絡体制の構築も急務です。

加えて、義務化される事業を運営しつつ、施設法人と大きく異なるのが社会福祉協議会です。災害時には直後から災害ボランティアセンターという被災地の民間の支援拠点を担い、その後も被災者支援に見守り事業等を通して関わっていくことが求められる組織であるため、法人全体での対策を考えることが必要となるのです。

そして最も大切なことは「受援」の視点です。大規模災害時には、もともとの職員体制で乗り切れるほど現実には甘くありません。そこで注目すべきは「受援」です。その業務が人員不足でまわせなくなることを前提にした時、どこへ支援の要請をすればいいのか。裏を返せば、被災後の混乱期に命を守り事業を継続できるかどうかは、それぞれが日常から相互に支援し合える体制をいかに構築しておくかにかかってきます。BCPは言い換えれば「受援計画」ともいえるのです。

編集後記

去る3月11日は東日本大震災から12年となる日でした。この歳月のなかで、復興や再生が進んだ部分があれば、未だ解決からは遠い部分や、新たな課題もあるでしょう。そして、2月に発生したトルコ南部地震などは、災害はいつどこで起こるかかわからないことを改めて考えさせます。私たちにできることは、こうしたなかでいかに災害への「備え」を実践できるか、またそれをいかに周囲とのつながりのなかで実現できるか、ではないでしょうか。4月からは学校やお仕事など、新たな環境での暮らしが始まった方々も多いかと思います。そうした中で、備えと支え合いのヒントになる情報を発信していけたらと考えています。どうぞよろしく願いいたします。(内田伸一)

震災リゲインプレスとは

東日本大震災の翌年、2012年創刊。震災をめぐる復興・支援・防減災の備えなど様々な情報をお届けする季刊フリーペーパー。創刊10年目を迎えたいま、改めて東北の情報を軸にした発信を目指して再スタートしました。過去号閲覧や会員登録ができるウェブサイトもあります。

NPO法人震災リゲイン

理事(五十音順): 相澤久美、内田伸一、大場健一、鬼本英太郎、日下部泰祐、佐々木豊志、関口威人、高木伸哉、田北雅裕、福井一朗
監事: 渡部宏幸 | 編集: 相澤久美、内田伸一 | デザイン: 八木直子

NPOの
会員に
なる

あなたの力を貸してください 震災リゲインNPO会員募集!

NPO法人震災リゲインは、活動に賛同して下さる会員を募集しています。会費は各地への『震災リゲイン』送料等に充当させていただき、会員の皆様にも同紙をお届けします。周囲の人に手渡し読んでもらうことで、みんなで災害への備えを促進し、復興過程の被災地を支える活動に繋がしましょう。各種ご質問は下記へ。

ご入会は⇒ shinsairegain.jp

会費は賛助会員/正会員一口250円/月から、
団体会員一口2,500円から。詳細は上記サイトから
「会員登録・寄付」をクリック。

【ご寄付のお願い】活動継続のためのご寄付も随時受け付けています。
ゆうちょ銀行 記号番号00160-6-387514 口座名:トクヒ シンサイリゲイン
※他行からのお振込: 店名 0一九(ゼロイチキユウ) 店名019 当座0387514

ご意見、情報もぜひお寄せください shinsairegain.jp

特定非営利活動法人 震災リゲイン『震災リゲインプレス』編集部宛

〒106-0044 東京都港区東麻布2-28-6

info@shinsairegain.jp ☎03-3584-3430 FAX 03-3560-2047



震災リゲインプレスは以下の協賛により発行しています。

